國學院大學学術情報リポジトリ

首都圏方言について考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, マリ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000926

首都圏方言について考える

久　野　マリ子

1　首都圏方言について

1.1　ことばの習得と変化

従来の方言研究では、～方言というのは、その土地の先祖から受け継いだ伝統方言を継承している。しかし、現代日本語を代表する首都圏方言の場合、その土地の伝統的方言を受け継ぐ人だけではなく、全国から首都圏へ移住してきた人々が、学習した共通語を日常の言語生活で使い次世代の、2世、3世は学習した共通語を母方言として成長する。このことが今までの方言研究の対象としてきた方言とは違う。

ことばの習得と変化いう観点から見れば、言語地理学で著名なW.A.グロータス神父が、「ことばの習得と変化について」という論文の中で、有名なダンテの「母語による詩論」の一節を引用している。「母語とは乳母から授かる言語のことである。この母語こそ何よりも尊いものである。」「人は気まぐれで移ろいやすい。風俗・習慣と同様、言語も時と所によって異なる。しかし、人生は短く、言語変化の進行はゆっくりと進行する。そのため、人はことばの変化になかなか気がつかないのである。」(『言語生活』339特集「新しい方言ができるとき」昭60〈1985〉)

母語は母方言と読み替えることができる。言語形成期を過ごした土地の方言がその人の母方言となるから、東京では東京方言を母方言とする人々が土地のことばを代々受け継いできて、緩やかな変化をしていることが予測される。しかし、東京は江戸の頃から各地方から移住する人が多く、また江戸という地域そのものも拡がり続けている。そのため、親から受け継ぐことば

が、代々その土地ではぐくまれたことばではなく、東京で暮らすために学習した「共通語」を使う親から、親の母方言の干渉を受けた「共通語」を受け継ぐ集団が増えることになる。東京に移住した一世の親の世代は育った地域の伝統方言を話すことができるが、東京で育った二世以後の子供は「共通語」を基盤としたことばを母方言とするわけである。

かつての東京では、伝統的に山の手ことばや下町ことばの他、葛西弁、吉祥寺弁などのそれぞれの地域で受け継がれている伝統的方言があった。しかし、新しく東京に移り住んだ人々は、その地域の伝統方言を受け継ぐことはまれで、移住者の多くは学習した「共通語」を使い続けるようである。このような学習した「共通語」と母語とする人々の話すことばは、「東京語」や「共通語」ではなく、親の出身の方言とも異なる。このようなことばを「首都圏弁とか首都圏方言」とでも呼び東京語とは区別するのがよいのではないかと、『東京語のゆくえ』（1996）のシンポジウムの中で秋永一枝氏は提案しておられる。

「首都圏方言」を、首都圏に在住する人や、通勤通学する人々が日常の言語生活で使用している生活語と捉える。従来、東京で話される方言は東京方言とされてきたが、「東京」拡散するにつれてそれが示す地域が曖昧になり、東京方言を母方言とする人が相対的にその数を減らしてきた。このことから、首都圏で行われる、東京方言に似た方言を「首都圏方言」と呼ぶ。首都圏方言は、江戸語、東京語を基盤として成立し、「共通語」「標準語」ときわめて近い体系を持っている。

本稿では、首都圏方言と共通語の違いと使用される場について考える。次に首都圏方言の緩やかなことばの変化の例として首都圏方言におこりつつある特殊拍の変化について述べる。

1.2　共通語・標準語と方言

共通語や標準語、方言について、先行研究ではどのように述べられているであろうか。主な議論をみてみよう。

『国語要説』（和田利政、金田弘５訂版　2003年　大日本図書）によれば

次のようである。

方言については、「ある地域で日常話されることばの体系（音韻）・アクセント・語法・語彙などの総体」。さらに「例えば兵庫県や鹿児島県で用いられていることばで、共通語と同じ単語であっても、その地域で使われていることばは方言である」とする。

共通語については、方言に対して「全国どこでも共通に用いられることばの体系を、共通語（または全国共通語）」とし、さらに「それが使われる場面は、学校の教科書や新聞やアナウンサーなどが使用することばがそれにあたる。」とする。続けて「一般に、東京地方の共通語（これを地方共通語ともいう）が基盤となっているといわれるが、そうした特定地域の生活語に基づくものとしてとらえるよりは、文字言語を基とした音声言語が全国に普及したものであるとも言われている。」としている。

次に標準語については、「一般にこれを標準語と呼ぶことがあるが、厳密な意味での標準語とは、自然に選択された全国共通語を、さらに機能面・歴史面などから検討を加え、人工的修正を行って、かくあるべしと定められた理想的な言語」とし、さらに、「標準語制定については、これまでにいろいろの意見が示されてきてはいるが、いずれも具象性に欠けている。制定の実現には、まず理想的言語理念の確立や、国民の標準語制定についての関心の高まりなどが必要とされる。」と標準語論の現実の課題について言及する。

ここでは、共通語は文字言語が基となった音声言語としていて、共通語を音声言語であるが、きわめて文字言語に近いものを想定していることがわかる。日常の言語生活で用いられる生活語の中で、くだけた言い方の共通語については言及されていないのである。

共通語と標準語と方言についての定義は、多くの辞典・概説書ではほぼ同様の議論がなされ、『国語要説』の議論は穏当な説となっている。

共通語について、具体的にどのような実態であるかを詳細に記述したものは、管見に入らない。現実にあることばとして、現代日本語文法は共通語の文法を記述し、音声、アクセントはアクセント辞典に示されるものが共通語のアクセントである。また、語彙は、国語の教科書に採録されているもの

や、国語辞典に記載されている語の説明がそれにあたる。これらは、文字言語を基としていて、豊富な文体の変種を特徴とする音声言語は表示されていない。

方言についての立場は『国語要説』とほぼ同じであるが、共通語に対しては平山輝男『日本の方言』（昭和 43）では、少し立場が異なる。

方言は「言語形成期を過ごした地の方言は誰でももっている」とする。しかし、交通手段やコミュニケーション手段が発達したことにより生活圏が広まって、他の言語社会集団と交流が盛んになるにつれて、「他の異なる方言とスムースに話し合いをすすめるために皆に共通した言語、すなわち共通語が必要となります。」とする。

また、共通語に必要な要素について「共通語は互いに違う方言を持つ人々の意思伝達の不便をなくするための要求に応じて各自の言語良識により生まれ、また発展するものです。だから共通語はあくまで口語であり、方言と共存しますが、方言そのものではありません。」と口語である事を強調する。

方言は話される地域が限られているが、共通語は「ある土地に限定されず、同じ国語圏内ではどこでも通じる共通な言語です。」「全国諸方言の差を超えて共通に通じることばとして共通語を想定し、現実の方言が基となる」として、東京方言がそれに相応しいことを述べている。その理由として「共通語はなるべく方言色の少ない理解しやすい」方言が相応しく、共通語の基礎となる方言の条件として、「全国諸方言の中で一番優勢で、それが普及しやすいのが条件」で、この条件を満たすには、「政治・文化・交通、その他のいずれの面からも一国の中心をなす地域に行われ」、これらの要件を満たす方言として「現代の東京方言は現代日本の共通語の基礎となる性格を備えている」とする。

ただし、『日本の方言』は「東京方言と共通語とは別物」であることを強調する。共通語は「だいたい東京の教養ある社会の方言に近いのですが、どんなに教養がある社会の方言でも、その方言の全体計を、そのまま共通語として取り入れられるものではありません。」とし、東京方言を言語形成期としている教養のあるひとのことばでも「現にヒとシを混同して「広い」か

「白い」か区別ができないとか、「落ちてしまった」と言えば間に合うところを、わざわざ接辞をつけて「オッコッチャッタ」という場合」があり、あくまでも東京方言は共通語の土台をなすものであるというのである。

共通語は「東京方言の望ましくない要素は除き去り、全国諸方言を広く見渡して、その特徴をもできる限り考慮した、特殊な方言癖のない、通りのよい言語でなければなりません。」と言う。これは「一見、人工的修正が加えられるように思われますが、全国民の言語生活における言語への自覚と、言語良識によって自然にできあがる性質のものです。」と説く。共通語が東京方言と類似するも、「東京方言の話し手が自分の方言が共通語であるという「錯覚」を戒め」ている。この「共通語」論は、標準語に近い。当時まだ根強かった「方言コンプレックス」に対する配慮がみられるのは、口語を強く意識しているからであろう。

『国語要説』の共通語に対する考え方としては、「文字言語を基とした音声言語が全国に普及したもの」で、文字言語を基とした音声言語で、話しことばであっても書きことばに近いものととらえている。一方、『日本の方言』では、「東京方言は土台をなすだけ」で「全国諸方言を広く見渡して、その特徴をもできる限り考慮した、特殊な方言癖のない、通りのよい言語でなければなりません。」とあるように、話ことばである方言をより強く意識した議論となっている。

どちらの議論も、共通語は全国どこの地域でも話が通じることばであるという点は共通しているが、共通語を書きことばの延長と考えるのか、話ことばに立脚するのかという点で異なっている。

「共通語」にたいする立場の違いが当初からあったようである。この立場の差は、首都圏方言と共通語の差の解釈にも反映される。

共通語が文字言語を基とするならば、日常の言語生活で使われる丁寧でない様々な文体は、共通語には現れにくい。一方、東京方言や首都圏方言という名称は、音声言語である話ことばに対するものであり、日常の言語生活で現れる丁寧な文体から丁寧でない文体まで全ての場面で使われることばである。

共通語の使われる場面も、「学校の教科書や新聞やアナウンサーなどが使用することば」であるとすると、日常の言語生活すべてを文字言語で書くことはしないから、共通語だけで言語生活すべてをおくることは難しくなる。

1.3　首都圏方言と共通語について

首都圏方言と共通語との差がわかりにくいという指摘がある通り、現実の方言事象は共通語と首都圏方言は似ていて、その違いを一々指摘するのは多言を要する。しかし、共通語の使われる場面が前述のような「学校の教科書や新聞やアナウンサーなどが使用することば」であるとするなら、首都圏方言との差は見えてくる。共通語は、日常の言語生活の全ての場面や文体を表現するには不十分である。それは、悪態や罵詈雑言の共通語は確立されていないことからも明らかであろう。

それに対して首都圏方言は首都圏を中心に日常の言語生活で使われることばである。どのような場面でもどのような文体でも表現することができるのが生活語である。ただ、共通語は東京の山の手方言の教養のある層のことばを基盤としているため、丁寧な文体としての首都圏方言は共通語に限りなく近い。実際に、伝統的な山のことばの話し手や、首都圏方言の話者の中には、このような共通語の文体で日常の言語生活を送っている人も少なくない。

首都圏方言は日常の言語生活において、丁寧でない場面や気の置けない親しい人同士、目下の人に対する場面等では、南関東方言の特徴を多く有し、訛音、俗語、略語、俚言を含みながら、様々な場面によって巧みに文体を使い分けていると思われる。

首都圏方言の話者の中には首都圏以外の地域方言を母方言とする、共通語を学習によって習得した人々がいる。首都圏を除く日本全国の地域方言の話し手は、学校教育や書籍やマスコミ等を通して共通語を学習して習得する。そのため、そこに現れない日常生活の中の丁寧でない場面の文体では、伝統方言を用いることになる。このため、地方出身者の学習した共通語とその人達が使う首都圏方言には相違点がある。

言い換えれば、首都圏に暮らす地方出身者は学習した共通語を話すが、日常の言語生活では各自の方言に干渉された首都圏方言を話しているのである。それは東京方言を継承した人たちの東京方言とは異なり様々な変種を含み個人差も大きい。このような人たちは、言語形成期を首都圏ですごした話者のような、自然な首都圏方言は話すことはできない。

このような変種の実態は明らかではないが、共通語と首都圏方言は差異のあることばと考えられる。

「首都圏方言」は、主に東京、千葉、埼玉、神奈川などの東京圏で話される。主に首都圏への通勤・通学できる東京圏の方言であるため、伝統的な東京方言、神奈川方言、千葉方言、埼玉方言などの南関東方言の特徴を基に共通語化した地域方言を基盤とした生活語である。

主な話し手は、学習した共通語を話す親に育てられ、学習した共通語を母方言として育った首都圏に生育する二世、三世である。この話し手に共通する特徴は、伝統的な地域方言を受け継がず、母方言となるその地域の伝統的方言が話せないと自覚していることである。これらの話し手は、漠然と東京で（首都圏）生まれて育ったから、自分は共通語を話しているのだろうと思っている。しかし、そのことばの実態は、伝統的な「山の手ことば」でも「下町ことば」でもない。

共通語では、東京方言の「今朝の電車ときたら、混んじゃって」「たいへんなもんだったわ」「そろそろ、行くかい」「だから何の事さ」「やだ、もう８時」「ありがとうよ」のような表現や、「してねーだろ」「まだ居んのか」のような訛音は受け継いでいない。しかし、首都圏方言ではこれもその一部として認められるであろう。また、首都圏出身ではない人々が、母方言を持ちながらも東京で暮らすために日常の言語生活は学校教育等で学習した各自の母方言に干渉を受けた共通語で、「東京方言もどき」の生活語を話している人も多い。これらも「首都圏方言」の一部である。

１.４　首都圏方言、共通語は何時どこで話しているのか

共通語はいつどのような場面で使われるのであろうか。首都圏方言と共通

語の使い分けをみるために、近年に発表された漫画を調査してみた。漫画を使うのは、次のような理由である。

① ほとんど話ことばで物語が展開されている。

② 文字言語であるが、できるだけ音声言語に近づける工夫がなされている。

③ 登場人物の思考や感情など、現実の世界では音声では実現されないものも文字で書き表されている。

④ 登場人物の性別、性格、年齢、職業、学年などの細かい設定が示されていることが多い。

⑤ 登場人物がその役割にふさわしいと作者が考える言葉づかいが台詞として選択されている。

作品を選ぶに際して、作者が東京かあるいは首都圏方言の話し手であり、舞台が現代の首都圏であること、主な登場人物が高校生や中学生で、様々な年代の人が登場する作品を選んだ。言語形成期が首都圏方言でない作者の書く台詞は、作者の母方言の干渉を受けた共通語や首都圏方言である恐れがある。

漫画の場面に出てくる台詞は音声言語に付随する特徴や登場人物の感情を表すために、文字の種類や活字の大きさにも工夫がなされているが、それについては考慮しないことにする[注1]。

文字で示されているのは、場面や物語の説明をするものと、登場人物の会話や頭の中で考えている内言がある。

場面の状況や説明は、脚本のト書きのようなものや擬声語擬態語がある。ドラマのナレーションとして現れるようなもので、「ナレーション体」とでもいうべきで、共通語。文字言語に近い。発話の相手は不特定多数で、自問自答、論理の構築や思考を表している。

物語を進行させる発話には、登場人物同士の会話、それぞれの登場人物の内言、作者の読者に向かって発するコメント、オノマトペ、動物の声（鳴き声を擬人化したもの）などがある。この中には、音声言語の発話と、音声を伴わない発話とがある。

音声のある発話では、役割語としての会話のスタイルが展開される。登場人物の年齢、身分、キャラクターや、感情の起伏など場面によって差が現れる。首都圏方言の共通語に近い文体から丁寧でない文体、東京方言、各地方の方言が現れる。役割語としての使い分けは、大人は共通語、若者は首都圏方言である事が多い。

漫画の中には、音声を伴わない発話が現れる。話し相手の発話や状況に対する登場人物の評価やコメントは音声は伴わないが、首都圏方言である事が多い。これは、相手の発話の間違いの訂正や、自分自身に対して激励する言い方などで、「コメント体」とか「ツッコミ体」とでもいう発話で、より音声言語にちかく首都圏方言が多く使われる。

作者が東京都足立区出身である『３月のライオン』(注2) と、東京都渋谷区出身である『海街 diary』(注3) では、音声を用いた会話のうち、共通語が使われる場所は、病院や銀行の職場での公的な場面が多く、教師との面談、授業中での発言や三者面談等にみられる。

首都圏方言が話されるのは、若者、20 代前半の OL 、若手の棋士、高校教員、高校生、中学生どうしの気取らない会話にみられる。「～ジャン」のような文末詞や、全く文末詞を使わない発話、オモシレ―などの訛音、チューボー（中学生)、カツアゲ（恐喝）のような若者の使う俗語もみられる。『三月のライオン』では、舞台設定が東京の下町で、ほとんどの場面が東京であるため、大人同士でも気が置けない人同士の会話では、東京下町方言が使われている。

１.５　方言調査ではどの文体を調査するのか

40 数年の間方言調査を続けてきたが、方言調査で、方言のどのレベルのスタイルを聞こうとしてきたのだろうか。アクセントの場合なら、特に感情を込めないで発音した場合のアクセントを採集する。反省的型を聞きたい。できるだけ普段の日常生活の中で、親しい人と普通の会話をしている相の方言を聞きたいと思う。そのために、極端に緊張をした場合のアクセントや、共通語化したよそ行きの方言を聞かないようにしてきた。

しかし、方言の日常生活の中では、公の場合の言い方や、教室の中での質疑応答や、スピーチのような場面ではより共通語的な言い方をする。また、日常の言語生活の中でも伝統方言的な言い方も、共通語的な言い方もする。たとえば、「雨がふっている」を筆者の母方言である兵庫県相生方言でいうと「アメガ　フッリョー」「アメガ　フリヨー」の２種類がある。フリヨーの方がやや丁寧な言い方である。フッリョーは、子供、ごく親しい人の間で気取らない会話や、親兄弟の間で特に何も取り繕わなくてもいい場面で使うが、どちらも相生方言である。

方言調査の調査項目にもよるが、従来の調査でこの差についてあまり配慮していなかった。現在では方言調査はこのような文体の差に注意を払わないと、誤りではないが、言語生活のある一面だけを切り取った資料、例えば共通語化した資料や卑俗な言語ばかりを集めることになる。

首都圏方言の若年層の資料は、できるだけ卑近な例で、場面も気取らない場面での発話を想定している。

２　首都圏方言の若年層の特徴

首都圏方言の若年層の具体例を示す。この中には丁寧な文体でも使われる例もある。また、すでに全国各地の若年層に「共通語」として広がっている可能性がある。

（１）「定員（ていいん）」と「店員（てんいん）」はどちらも「テーイン」と発音される。母音の前の撥音と長音がこの音環境で中和している。第２拍目がどちらも長音に発音され音韻的対立をしない。この中和現象については後述する。

（２）「三（さん）」＋ハ行で始まる助数詞が、形態変化を起こさない。例えば、サンハク（３拍）、サンヒキ（３匹）、サンフン（３分）、サンヘン（３編）、サンホン（３本）のように発音される。撥音の後の助数詞がハ行で発音され、伝統的なサンパク、サンビキ、サンプン、サンペン、サンボンという形態音韻変化をしない。形態音韻規則が単純化

している。

（3）「サムクナイ」「～無理じゃね」などの同意を求める場合、浮き上がり音調が定着してきている。これによって、打ち消しの「～ない」（寒くない）と、同意を求める「～ない」（寒いと思うでしょう）を、イントネーションで言い分けることができる。

（4）人称代名詞の形式に変化が見られる。「オレ」「ジブン」「ウチ・ウチラ」が使われる。男女や年齢に関係なく使える「ジブン」「ウチ・ウチラ」が好まれる。

　男性一人称代名詞「ボク」は、若年層より中高年層で多く使われ「オレ」が優勢である。

（5）複合動詞連用形名詞＋スルの用法を、本動詞のように一語として活用させる例が増えている。例えば伝統的共通語では「ポテトサラダを作り置きしてきた」というところを「ポテトサラダを作り置いてきた」のように表現する。

（6）大学生の使う挨拶表現に変化がある。朝の挨拶表現の「おはよう、おはようございます」が、時間に関係なくいつでも使われる。また、「おつかれさま」が一日中いつでも使われ好まれる。昼の挨拶表現の「こんにちは」は、「おはよう」よりも正式な挨拶表現として、昼と夜の挨拶表現として使われる。大学生だけでなく教員の間でも使用される。

（7）「体育」を「タイク」、「雰囲気」を「フインキ」という言い方はさらに普及し、ワードプロセッサーや携帯メールの漢字変換では、「タイク」「フインキ」と入力しても正しい漢字表記が現れるようになっている。「フインキ」という現象については後述する。

（8）「～です、～ます」体を堅苦しい表現と捉え、親しい間では避けられる傾向がある。「～です、～ます」体を敬語として高い文体で使う。大学生は教員の前では「～です、～ます」体を使うが、同学年の学生間や下級生の前では、「俺ンダヨ」「オレンチ　会社員ジャン（俺の家は会社員だろう）」のようなくだけた文体で話す。そのほうが、その

場に相応しい文体として選ばれる。田中（2010）で指摘された現象は、中学生だけでなく首都圏方言の大学生にも広まり、丁寧な文体でも丁寧でないくだけた表現でも、どちらも共通語だと捉えているようである。

この現象は、共通語は公の場で話す文体であり、教員の前では後輩の前であっても丁寧な共通語文体を選ぶべきだと思っている関西地方出身者の共通語意識とはズレがある。

（9）伝統的東京方言アクセントとは異なるアクセントが使われる。例えば、「砂」は2拍名詞1類であるが、スナガは［LHL］（砂が）の尾高型に発音される。2拍名詞1類の語が平板型ではなく尾高型に発音される語がある。「鎌、軒、味」などもこの例である。語的なアクセントの型の変化だけではないようである。また、「着く」「突く」がどちらも頭高型に発音される。この現象は、かなり高齢者にも聞かれる。

3　首都圏方言にみられる音変化

3.1　調査について

本稿で使用した資料は、平成22年から調査を続けている首都圏の大学に通う大学生を中心に実施したものである。平成24年に國學院大學で実施した調査では、学生は222人のうち東京42、埼玉41，神奈川33，千葉25であった。残りは、栃木12，静岡7，長野5、北海道4，茨城4、広島4で、ほとんどが首都圏が生育の学生であった。平成25年度調査の学生は368名で、ほとんどの学生の生育地が首都圏であった。

調査の方法は、まず、平成22･23年度に久野担当の100人程度の複数のクラスで予備調査を実施した。音声に関しては仮名は発音通りに書かないことを説明し、次に自分の発音を発音通りに仮名で書く練習をした後、調査語を発音通りに仮名を書く調査を実施した。発音を仮名で書かせる方法は久野眞高知大学名誉教授の実施した調査方法を踏襲したものである。

調査結果を整理して得られた代表的な仮名表記を選び、多人数調査用のア

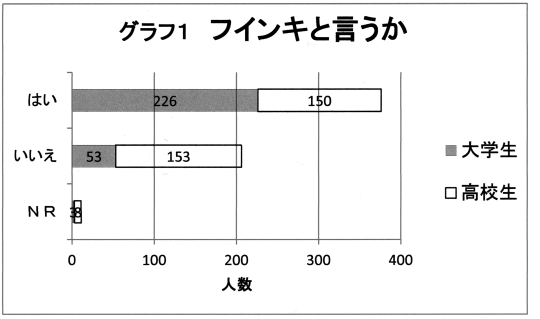
ンケート調査項目を作成した。この調査の他に、平成 23 年度神奈川県小田原調査、平成 26 年千葉県館山市千葉県立安房高等学校生徒 312 名の資料を使用した。小田原調査は面接調査、千葉県高校生調査ではアンケート調査である。

３.２　調査の結果集計と分析

3.2.1　雰囲気を「フインキ」と発音すること（グラフ１）

「雰囲気」を「フインキ」という発音が、首都圏の若年層で優勢である。首都圏だけでなく関西圏でも優勢であるという。調査を開始した頃は「ふいんき」という入力では雰囲気という漢字に変換はされなかったが、最近の携帯電話やワープロでは「ふいんき」と入力しても雰囲気（ふんいき）の誤りとして、正しい漢字表記に変換できるほど広がっている。

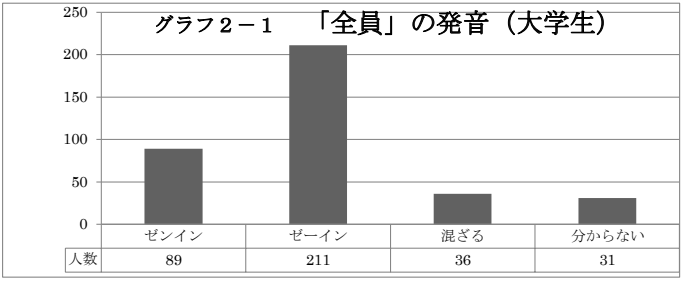
グラフ１は、高校生と大学生が、「フインキ」と言うかどうかを聞いた結果である。久野・木川（2012）では小田原方言老年層では「フインキ」認められなかったことからも、新しい変化である。

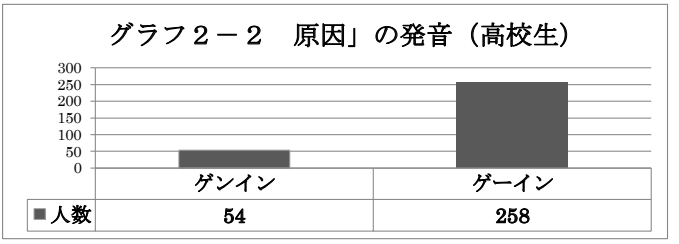


3.2.2 「全員」、「原因」の第２拍目の音（グラフ２－１．２）

「雰囲気」と類似する音環境で、「全員」を「ゼーイン」という発音が増えている。グラフ２－１から、多くの学生が「全員」を「ゼーイン」と発音している。「全員」は、ミニマルペアの候補となる語に馴染みのある語がない。同様の音環境で「原因」を「ゲーイン」も多く聞かれる。高校生の調査を２－２のグラフで示した。これのミニマルペアになる「鯨飲」も、若年層

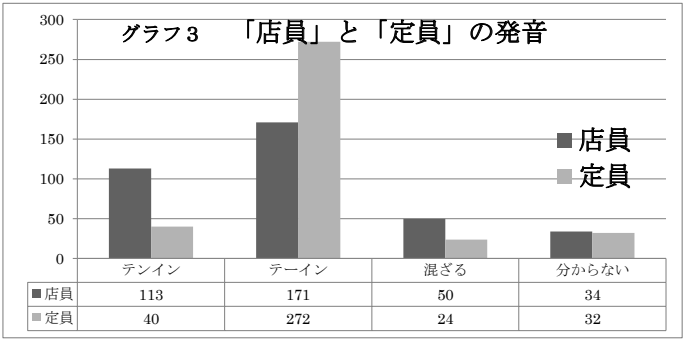
では理解語彙でしかない。「全員」「原因」ともに第２拍を長音に発音する学生・生徒が多い事が分かる。





3.2.3 「店員」「定員」の発音（グラフ３）

「店員」「定員」の発音をみる。このミニマルペアは学生にとって馴染みがあり、第２拍目が長音か撥音かで対立する対語である。グラフ３は大学生に「店員」「定員」の発音を聞いた結果である。どちらも「テーイン」と答えた学生が多い。

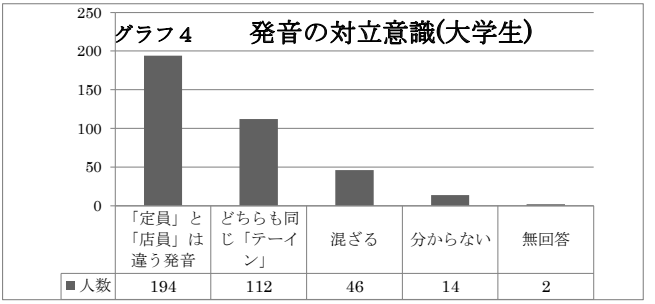


これは、ｉの前の撥音がｉの鼻音化した音で発音されることが関与してい

ると思われる。この傾向は高校生でも同様である。312 名中 205 名が「店員」をテーインと答えている。

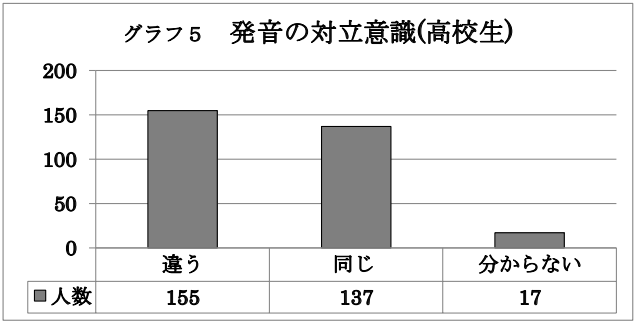
3.2.4 「店員」「定員」の対立意識（グラフ４．５）

「店員」と「定員」が同じ発音だと意識しているかどうかを聞いた。
グラフ 4 から、「定員」も「店員」も同じように発音していると答えた学生が 112 名、どちらも発音が混ざると答えた学生が 46 名であるから、158 名の学生が同音か発音の差が曖昧になっていると意識している。二語を違う音であると意識している学生は 194 名である。



千葉県館山市の高校生でも大学生とほぼ同様の結果が出てた。（グラフ５）違うと回答した生徒のほうがやや多いが、同じという回答とほぼ拮抗している。

小田原の調査でもほぼ同様の結果であった。首都圏の若年層では「店員」も「定員」もテーインと長音に発音する話者が増えており、定員と同じ音に発音しているという自覚ができる話者もいることが分かる。



3.2.4 「店員」「定員」の文字表記での対立

「店員」「定員」を同じ音で発音しているとする学生が多いが、文字表記の上での対立は保たれている。大学生では 323 名のほぼ全員の学生が振り仮名は「てんいん」であると回答している。

4　首都圏方言にみられる緩やかな音変化

第 2 拍目の撥音の変化が起こっていることについて述べた。音韻の変化はダンテのいうように「風俗・習慣と同様、言語も時と所によって異なる。しかし、人生は短く、言語変化の進行はゆっくりと進行する。そのため、人はことばの変化になかなか気がつかないのである。」という現象である。首都圏方言の若年層に母音のおきている音韻変化の現象は、もはや語毎の個別的な音変化ではなく類似の音環境においても変化する広がりをみせている。

「雰囲気」「店員」の第 2 拍目が撥音から長音に変化する変化は、ゆっくりとしかも確実に起こっている。同様の環境で、第 2 拍目が撥音と長音で対立する語「延々（と）」と「永遠」、「犬猿」と「敬遠」、「五千円」と「ご声援」についても調査した。どの対語も「エーエン」「ケーエン」「ゴセーエン」のように第 2 拍目が長音に紛れる。しかし、その数は、「店員」「定員」ほどは多くなかった。

音環境としては、Ｃｅ＋撥音という環境での撥音が、Ｃｅ＋長音に発音されやすい。また、Ｃａ＋ｉの音環境の語についても調査した。「会員」という語で、アイの連母音を長音に発音する、カーインと答えた大学生が 100 名いた。首都圏方言では連母音 ai の融合はエーとなるから、ケーインとなるはずだが、ケーインと回答した学生はいなかった。高校生の調査でも 312 名中 112 名が「カーイン」と回答している。このような語中で第 2 拍が撥音、次の母音がイの語で、語中の撥音と長音の対立が薄れ、中和現象を起こすという音韻変化は、４拍以上の語に起こっている。

詳細は省くが、イ母音だけでなく、「永遠」「会員」のようにエ、アの母音においても緩やかではあるが同様の現象が起きている事が明らかになった。

つまり、このような中和現象は、現在の段階では、撥音＋イの語が目立つが、将来は撥音＋母音という環境であれば発音上は対立がなくなる可能性があるということである。

一方、首都圏方言にある方言と気づかない訛音がある。「体育」を、第2拍3拍のイを短呼化した「タイク」と答えた学生が220名いた。長音の短呼化が圧倒的に優勢である。「女王」の発音では、第2拍に長音を挿入した「ジョーオー」が225名いた。正しい音声の「ジョオー」よりも圧倒的に多い。「タイク」「ジョーオー」は伝統的東京方言の訛音で、方言とは気がつかないまま首都圏方言に受け継がれている。

この音声事象は小田原市や千葉県館山市の高年層でも優勢であることから、関東方言全域で勢力があると推測される。さらに、この変化は首都圏方言のみの現象にとどまらず、日本語全体に広がっている可能性がある。

本研究は平成24.25.26年度科研費基盤研究（C）「首都圏方言の基層についての基礎的研究」（研究代表者：木川行央）による成果の一部である。

注

（1） 笑い声を示すのに同じ「はっはっはっ」でも、かたかな、ひらがな、字体の差、大小などで笑いの意図を書き分けることがある。

（2） 『3月のライオン』。羽海野チカ（うみのちか）による日本の漫画。2007年～2015年連載中。2014年手塚治虫文化賞受賞。東京下町を主な舞台とする将棋を題材とする。高校生棋士が主人公。主人公は言語形成期は長野県、8才から東京という設定。東京下町が言語形成期の登場人物が多い。作者は、東京都足立区出身の女性漫画家。年齢は公表されていない。40歳台と思われる。

（3） 『海街ｄｉａｌｙ（うみまちだいありー）』。吉田秋生（よしだあきみ）による日本の漫画。2006年～2014年不定期連載中。鎌倉を舞台に4人の姉妹が暮らしを描く。長女、二女、三女の言語形成期は鎌倉。四女は、仙台、山形、12才から鎌倉。父は鎌倉、母は金沢出身という設定。第11回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞、マンガ大賞2013受賞。作者は、東京都渋谷区出身の女性漫画家で1956年8月12日生まれ。

参考文献

［1］ 秋永一枝他編（2007）『日本のことばシリーズ 13　東京都のことば』明治書院

［2］ 井上史雄編（1983）『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』（昭和 56・57 年度 （総合研究 A）研究成果報告書）

［3］ 大島一郎・久野マリ子（1991）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(1)（重点領域研究「日本語音声」研究成果刊行書）

［4］ 大島一郎・久野マリ子（1993）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(3)（重点領域研究「日本語音声」研究成果刊行書）

［5］ 木川行央・久野マリ子（2012）「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」『Scientific approaches to language 11』神田外語大学

［6］ 国広哲弥・中本正智（1984）『東京語のゆれ調査報告』（特定研究「言語の標準化」総括班）

［7］ 久野マリ子編（2009）『首都圏方言の研究』國學院大學大学院文学研究科

［8］ 久野マリ子編（2010-2013）『首都圏方言の研究』（1）－（5）國學院大學大学院文学研究科久野研究室

［9］ 久野マリ子・木川行央（2012）「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要 18』

［10］ 國學院大日本文化研究所編（1995）『東京語のゆくえ』東京堂

［11］ 神保格『標準語研究』（1950）日本放送出版協会

［12］ 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院

［13］ 田中ゆかり他編（2015）『日本のことばシリーズ 14　神奈川のことば』明治書院

［14］ 東京都教育委員会編（1986）『東京都言語地図』東京都教育委員会

［15］ 中村通夫『東京語の性格』（1948）川田書房

［16］ 平山輝男『日本の方言』（昭和 43）講談社現代新書

［17］ 三井はるみ編（2014）『首都圏の言語実態を動向に関する研究成果報告書　首都圏の言語研究の視野』国立国語研究所

［18］ 和田利政、金田弘『国語要説』５訂版（2003）大日本図書